孔子集団について

高橋　均

On the Confucian Group

Hitoshi TAKAHASHI

まえがき

孔子を中心として組織された集団が[1]，どのような歴史的状況のなかに成立したのか，そして，その集団はどのように構成され，歴史的にどのような役割りを果したのか，ということについて，孔子の弟子たちの活動を通して考えてみようというのが，小論のねらいである。先秦の諸家が，個人としてよりも，集団として活動している事実に注目するならば，孔子という歴史的人間をとらえる場合においても，集団としての外廓をまずとらえることが，必要であるように思われる。これらのことが少しでも明らかになることによって，やがては集団の中心にいた孔子の歴史的位置づけも可能になるのではなかろうか。

1—1

比較的はやく，孔子の中国歴史上における位置について注目すべき発言を行なったのは，馮友蘭であった。かれは，〈孔子在中国歴史中之地位〉(《燕京学報》第二期・1927年北京）において，大要つぎのようにのべる。

○六芸を教えたのは孔子に始まるのではないが，六芸を一般の人に教えたのは，孔子に始まる。

○孔子は，中国で最初に学術を民衆化し，教育を職業とした“教授老儒”であり，かれによって，戦国の講学・遊説の風が開かれた。そして，非農・非労・非商・非官僚である士の階級を作り出した。

○孔子以前の士とは，大夫士の士，あるいは軍士の士である。孔子により創出された新しい階級である士は，生産には従事せず，人に養われる立場にあった。

○士階級の創始者である孔子は，中国歴代の政治権力が士の手中にあったため，先師先聖の地位を容易に獲得することができた。

馮友蘭のこの指摘は，孔子が歴史上に果した役割りを，みごとに摘出してくれたといえる。しかし，孔子の歴史上の地位を追求することに急だったためか，その役割りを過大視しているきらいがないでもない。たとえば，‘非農・非労・非商・非官僚である士の階級を作り出した’というみかたについてである。孔子とその弟子たちは，従来なかった新しい階層を構成したのかもしれないが，このことから，この階層は孔子によって作り出された，ということがいえるのかどうなのかということになると疑問である。むしろ，馮友蘭のいう孔子が創出したという士の階級は，孔子自身まで

もそこに含まれているような，そういう新しい階層として春秋中期から生まれつつあった，とみるほうが自然なのではなかろうか。

この春秋中期より新しく生まれてきた士階層について，孔子集団との関係を，社会経済史的立場から論じたのは，宇都宮清吉氏の〈孔子学団〉(《東方学報》創立二十五周年記念論文集・昭和30年京都）である。

それによると，春秋中期以後，鉄製農具の出現はそれまでの大血族団的家族の協働によってはじめて維持することが可能であった農耕を，容易にその協働から解放し，行動の自由をうることを可能にした。このことは，貴族共同体の解体をうながし，その結果，貴族共同体から解放された族員は，新国家体制の俸禄的官僚となるとともに，一方では没落する分子ともなる。かくて，貴族と農民社会の解体によって生まれてくる新しい民なるものが，一方は身分的降下のかたちで，一方は向上のかたちでひとつに混交することによって形成される。孔子の学団に入ってくるもの，つまり孔子の弟子たちは，まさにこの種の人びとであったろう。しかし，すべての人が学団に参加しえたのではない，一応自活しうる経済的能力をもつ人にのみ限定され，それ以外の人は小人として拒ぞけられた，ここに孔子の歴史的限界があった。

ほぼ以上のようにまとめることができよう。この宇都宮氏の指摘は，孔子の集団というものを考えるうえで，大きな示唆を与えてくれるように思われる。とりわけ，馮友蘭が孔子の功績に帰した士階級の創出ということを，社会経済史的立場からより深めたものとしてみることができる。孔子はけっして士の階級を創出したのではない，春秋中期からの社会変化のなかにその階層は生まれつつあったのである，そしてその階層のなかからある目的を持った集団が形成されはじめた，これがつまり孔子集団なのであろう。そうであるならば，集団には集団を成立させる事由があるはずであり，また集団として当時の社会とのかかわりあいのなかで，集団独自の機能を有していたはずである。それはどのようなことであるのか[2)]。

集団に参加することは，官僚として役立ちうる資格と能力とを獲得し，将来官僚として政治に参加するためであった。孔子集団では，そういう人びとは，君子あるいは士と呼ばれていたようである。孔子集団は，この君子あるいは士を育てるところであった。そのためには，集団に参加した人に君子あるいは士であるための自覚が要求され，その自覚のもとに行動することが要求された。孔子集団とは，このような人びとの集まりであったらしい[3)]。以上のことは，孔子自身，あるいはかれの弟子の事跡から知られることである。

ところが，孔子集団のなかにいて，官僚となりうる能力をもちながら，官僚として出仕することを拒否した人もいる。孔子集団に参加した人びとにとって，官僚として出仕するとはどういうことなのか，ということが検討されなければならなくなってくる。

《論語》のなかには，士についてふれる個所は非常に多い。今，その結論だけを記すと，士とは仕える，ということを意味している場合が多い。たとえば，つぎのようにいわれる。

子貢問曰，何如斯可謂之士矣。子曰，行己有恥，使四方，不辱君命，可謂士矣。(《論語・

子路》)

また，ことばの関係からみても，士が仕えるということと密接に関連していることは，これまでにすでに多くの人によって指摘されていることである[4]。この仕えることが士のひとつの側面であるならば，もうひとつの側面として，'道に志ざす'ということがあげられるであろう。《論語》のなかの孔子のことばとして，

士志於道，而恥悪衣悪食者，未足與議也。(《論語・里仁》)

とあることがそれを示す。そして，'道に志ざす'ことは仕えるときの前提であるようだから，その政治に参加する態度は，絶対につぎのようであってはならない。

子曰，鄙夫，可與事君也與哉。其未得之也，患得之。既得之，患失之，苟患失之，無所不至矣。(《論語・陽貨》)

孔子の称賛したあるべき士とは，つぎのような人であった。

子曰，直哉史魚，邦有道，如矢。邦無道，如矢。君子哉蘧伯玉，邦有道，則仕，邦無道，則可巻而懐之。(《論語・衛霊公》)

また曾子のいう

士不可以不弘毅，任重而道遠。仁以為己任，不亦重乎。死而後已，不亦遠乎。(《論語・泰伯》)

ということばは，はじめから集団に士の自覚として示されたことばとは思えないが，上述のことから当然みちびき出されることである。孔子集団において求められる士とは，このような能力と資格とを有する人のことであった。そのために，集団においてさまざまの教育が行なわれたのであるが，ここではそれには触れない。これからのべようと思うのは，孔子集団に参加した人びとが，どのように現実の政治とかかわりをもったか，子夏のことばを借りるならば，"学而優則仕"《論語・子張》とはどのようなことであったかということである。

1—2

孔子が弟子たちとともに，ある主張をもって行動していたことは，すでに《孟子・梁恵王上》に"仲尼之徒"という表現があることから知られる。その"仲尼之徒"について，同じく《孟子・公孫丑上》に"七十子"とあるから，七十人くらいの集団であったことがわかるのである。しかし，それが《史記》になると，

受業身通者，七十有七人，皆異能之士也。(〈仲尼弟子列伝〉)

あるいは，

弟子蓋三千焉，身通六藝者七十有二人。(〈孔子世家〉)

などとあって，七十二人あるいは七十七人とは，六芸に通じた異能の士の数であって，弟子の総数は三千人だった，ということである。この弟子の数が七十二人であるのか七十七人であるのか，あるいは七十人であるのか，また集団の総数が三千人であるといわれるのが実数であるのか，などと

いうことについて，今たしかめる方法はないし，また決めなければならぬことでもない。今はただ孔子集団に参加したのは七十人くらいであった，という諸書の記録を認めるしかないわけである。周知のように，〈仲尼弟子列伝〉には，七十七人の名前が示されているが，そのなかで事跡の明らかなのは，29人にしかすぎない[5]。

この29人のなかに，顔回などのように陋巷に居ることに甘んじ，貧窮生活をいとなんでいたと思われる数人の弟子がいる。かれらも，仕えることが貧しい生活から脱け出ることのできる方法であることに気づいていたにちがいない。孟子に，つぎのようなことばがある。

孟子曰，仕非為貧也，而有時乎為貧。娶妻非為養也，而有時乎為養也。為貧者，辞尊居卑，辞富居貧。(《孟子・万章下》)

あるいはこれは，孟子の当時の情況であるのかもしれない。そして，すくなくともその当時には，仕えることによってほぼ確実に，尊位と富とがえられるような事実があったらしい。

孔子の弟子たちについていうと，たとえば原憲についてのつぎの記事

原思為之宰。與之粟九百，辞。(《論語・雍也》)

孔子卒。原憲遂亡在草沢中。子貢相衛，而結駟連騎，排藜藿入窮閭，過謝原憲。憲摂敝衣冠見子貢。子貢恥之曰，……(〈仲尼弟子列伝〉)

閔子騫についてのつぎの記事

季氏使閔子騫為費宰。閔子騫曰，善為我辞焉，如有復我者，則吾必在汶上矣。(《論語・雍也》)

不仕大夫，不食汙君之禄。如有復我者，必在汶上矣。(〈仲尼弟子列伝〉)

漆雕開についての

子使漆雕開仕。対曰，吾斯之未能信。子説。(《論語・公冶長》)

公晳哀についての

孔子曰，天下無行，多為家臣仕於都。唯季次未嘗仕。(〈仲尼弟子列伝〉)

これらの記事は，仕えることによって尊位と富とを得ることを拒否した人が，孔子の集団のなかにもいたことを示している[6]。さきに示した士の定義からすれば，孔子集団のなかにこうした人びとが存在することは，当然といえるかもしれない。道に志ざすことと仕えることとが矛盾した時，かれらは道に志ざすことをえらんだ。これら仕えることを拒否した人びとのなかで，顔回には，つぎのような話しさえ生まれている。

孔子謂顔回曰，家貧居卑，胡不仕乎。顔回対曰，不願仕。回有郭外之田五十畝，足以給飦粥，郭内之田十畝，足以為絲麻。鼓琴足以自娯，所学夫子之道者，足以自楽也。回不願仕。(《荘子・譲王》)

もちろん，この話しがどれだけ事実を伝えているのかということには問題があり，この話しを伝えた人による脚色がなされていることも十分予想されることである。とりわけ，仕えることを拒否する理由として，“所学夫子之道者，足以自楽也”とのべていることは，道に志ざすゆえに，あるいは

“汙君”であるがゆえに仕えることを拒否した場合とは異なっており，孔子集団のなかに，このような立場をとる人が存在したのかどうかということは，疑問として残るのである。

以上のべてきた，顔回，原憲，閔子騫，漆雕開，公晳哀などは，前述した分けかたにしたがうならば，道に志ざすという側面を重視した人びとであり，孔子集団の性格を考えるうえで興味ある記事ではあるが，ここではこれ以上は論じない[7]。

1—3

それでは，出仕した弟子についてはどのような状況があったのであろうか。いうならば，‘仕える’という側面を重視した弟子たちである。以下，概看してみよう。

〔魯に仕えた弟子〕

子貢について

〈仲尼弟子列伝〉によると，“相魯”とあって，その地位にふさわしい活躍のかずかずが記されている。それによると，斉の田常が魯を討とうとして魯に危険が迫った時，孔子の門弟子である子貢は，孔子の指示によって，まず斉に行き，戦いの不合理であることを説き，ついで呉に行き……という具合に，まるでのちの戦国の遊説家のような役割りをはたし，田常の計画を中止させる。その結果を司馬遷は，

> 故子貢一出，存魯乱斉，破呉彊晉，而覇越。子貢一使，使勢相破，十年之中，五国各有変。(〈仲尼弟子列伝〉)

とのべる。〈仲尼弟子列伝〉にのべられる子貢の伝が，事実と合致しないことについては，先人にすでに考証があり[8]，また子貢にこのような伝が作られた過程については，私もすでに論じたことがある[9]ので，ここでは省略する。

しかし，《左伝》の哀公七年，十二年，十五年[10]などの記事によると，子貢は魯において政治の中枢にいたことが知られる。ただ，《左伝》のこの記事に応ずるようなことは，《論語》にはまったく見ることができない，わずかに〈雍也〉篇に，季康子と孔子の問答として，子貢に政治を担当できる能力があるかどうかたずねた

> (季康子) 曰，賜也可使従政也與。(孔子) 曰，賜也達，於従政乎何有。

とあることが知られるにすぎない。

子游について

《論語》の〈雍也〉〈陽貨〉によると，武城宰となったらしい。また，《論語》の記事をうけた〈仲尼弟子列伝〉にもそのことは記されているが[11]，時期的にははっきりしない。武城は魯の公邑である。

澹台滅明について

子游が武城宰になった時，子游によって登用されたことが《論語》の〈雍也〉篇に見えている。しかし，〈弟子伝〉はそのことにはふれず，出仕せず，行いを修め，弟子三百人を集め，名声が諸侯に広まったと記されている[12]にすぎない。

子夏について

《論語・子路》篇に，莒父宰となった時，孔子とかわした問答が記されている[13]。しかし，《左伝》および〈弟子伝〉には，このことについての記述はない。莒父は魯の公邑である。

子賤について

〈弟子伝〉によると単父宰となったとある。顧棟高によると，単父とは魯の地名であるらしい。ところで，子賤が単父の宰となったことは，〈弟子伝〉だけに見えることで，《論語》《左伝》などには見えない。歴史的事実として疑はしい。〈弟子伝〉のこの記事は，子賤が無為にして単父を治めたということが《呂氏春秋》などに見えているから[14]，それによったのであろう。

原憲について

《論語・雍也》篇に宰となったとあり，《集解》および皇侃の《義疏》によると，それは孔子が魯の司寇となった時，孔子の邑の邑宰となったのであるという[15]。

〔季氏に仕えた弟子〕

子路について

《左伝》，〈仲尼弟子列伝〉によると，季氏宰になったとある。そのことは，《論語》には直接記されていないが，《論語》の〈雍也〉，〈先進〉の各篇に，季氏とある種の関係があったことにふれている[16]。季氏宰となったのは，《左伝》によると定公十二年のことで，この時，孔子は魯の大司寇の地位にあった[17]といわれる。

子羔について

《論語・先進》篇によると，子路が子羔を費宰にしたという。費は季氏の私邑である。ところが，この記事をうける〈仲尼弟子列伝〉では，費郈宰になったとある。郈は三桓のひとり叔孫氏の私邑であるから，費郈宰とすることには誤りがある。《史記正義》が郈についてのみ注していることから，《史記》については費を衍文とする説が有力のようであるが，《論語》および日本に伝わる《史記》のテキスト[18]によると費宰となる。

冉求について

《論語》の〈先進〉〈季氏〉，《孟子・離婁》，《左伝》哀公十一年，〈仲尼弟子列伝〉などによると[19]，季氏宰であったらしい。季氏宰になった時期については，

> 康子曰，則誰召而可。曰，必召冉求。於是使使召冉求。冉求将行。孔子曰，魯人召求，非小用之，将大用之也。(〈孔子世家〉)

とあるから，この時季氏に仕えたとすればそれは哀公三年のことになる。そして，〈孔子世家〉で哀公八年の項に

> 冉有為季氏将師，與斉戦於郎，克之。

とあるから，この時にはすでに季氏宰であったように思われる。《左伝》の哀公十一年，十四年，二十三年には，季氏の家における冉有の役割りがそれぞれ記されている。

仲弓について

《論語・子路》篇に，季氏宰になったとある。しかし，《左伝》，〈弟子列伝〉ともにそのことを記していない。皇侃の《義疏》によると，季氏の采邑である費の大宰となったのであるという[20]。〈子路〉篇の文意からは，あるいはそう見たほうがいいかもしれない。

樊遲について

《左伝》哀公十一年に，冉有が季氏の左師をひきい，樊遲が右乗だったとある[21]。冉有はこの時，季氏の家宰であった。

閔子騫について

仕えることを拒否した人として，すでにふれた。かれは，季氏からその私邑の費の宰となるようすすめられたのである。

〔その他の場合〕

以上において，魯および季氏につかえた弟子について概見した。しかし，〈孔子世家〉に“孔子弟子多仕於衛”といわれるように，その他の地に仕えたことも多かったらしい。しかし，記事として残されているのは必ずしも多くはない，それについてのべる。

子貢について

魯を去ってのち，衛の相となったという，ことは〈弟子列伝〉に見えている[22]。

子路について

魯を去ってのち，孔子から衛の蒲の大夫となるようすすめられたが辞退。のちに，衛大夫孔悝の邑宰となる[23]。

子羔について

子路が衛で難にあった時，衛大夫であった。《左伝》〈弟子列伝〉に見える。

子夏について

〈弟子列伝〉によると，魯を去ってのち，西河で教授し，魏文侯の師となった，とある[24]。

宰予について

〈弟子列伝〉によると，斉の臨菑の大夫であったが，田常との乱に親族を誅せられたとある。この記事が孔子の弟子のものとしてはあまりに似つかわしくないため，のちの竄入であろうとする説が多い。しかし，事実であるのかどうかということとは別に，司馬遷の時に宰予についてのこの種の話しが世に広く行なわれていて，司馬遷はそれを伝に取り入れたものである，と思わざるをえない[25]。

有若について

哀公八年，呉の軍勢が魯に侵入した時，魯大夫微虎の私属徒七百人のなかに有若がはいっている。

以上のべてきたことをまとめると，孔子の弟子たちが仕えたのは，おもに魯においてであり，とりわけ季氏に仕えた場合が多いということ。またわずかな事例ではあるが，他国にも仕えており，それは，衛，斉，魏といった魯の近辺にかぎられている。この範囲が，ほぼ当時の儒家がもっていた勢力範囲なのであろう。孔子のいわゆる天下周遊のおり，従った弟子がそのさきざきで仕官するという場合があったかも知れない。しかし，それをはっきり示めす記事はない。かえって，〈孔子

世家〉の哀公三年の条にある，季康子に登用された冉有が孔子と別かれ魯に帰る時，子貢のいったことば，

子贛知孔子思帰，送冉求，因誡曰，即用，以孔子為招云。冉求既去。

とか，〈孔子世家〉の哀公六年の条にある，孔子が楚から衛に帰ったときのつぎの記事，

孔子弟子多仕於衛，衛君欲得孔子為政。

などからみると，弟子が先に仕官し，孔子がそこに招かれるということがあったようである。孔子の弟子たちがいつごろから仕えはじめたのか，ということもはっきりしないが，《左伝》定公十二年に，

仲由為季氏宰，将堕三都

とあるのが，時期を示す早いことのようである。だから，ほぼこの時期から，孔子の集団は活動を始めたとみてよいのではなかろうか。ちなみに，孔子が中都宰となるのは，定公九年のこと（〈孔子世家〉）である。

弟子たちがついた職位としては，地名を冠した費宰，武城宰などというのは，費，武城という邑の邑宰となったのであろうし，季氏宰というのは，季氏の家宰となったのであろう[26]。また，澹台滅明，有若，樊遲などは，家宰あるいは邑宰のもとで執務する，いわゆる“有司”なのであろう[27]。

2—1

魯の公邑である武城，莒父，単父，あるいは季氏の私邑である費の邑宰として，孔子の弟子たちが仕えていたらしいことはのべたとおりである。ここで，孔子の弟子たちが，どのようにして邑宰となっていったか，という問題について考えてみよう。とりあげるのは，季氏の私邑である費，魯の公邑である武城の場合である。

2—2

費が季氏の私邑であることは，すでにたびたびのべてきた。《左伝》隠公元年に，

夏四月，費伯帥師城郎。

とある。杜預の注によると，費伯とは魯大夫であるという。翌二年の伝に見える費庚父がこの費伯である。庚父の食邑が費であったところから，費伯と呼ばれるのである。僖公二年の《左伝》によると，季友に汶陽の田と費とが食邑として与えられたとある。費がはじめて季氏の私邑となるのであるが，この季氏に与えられた費が，庚父の食邑であった費と同一のものであるらしい[28]。季氏の邑となった費が《春秋》にふたたび姿を見せるのは，襄公七年に“城費”とあることによってである。この費に城ずくことについて，《左伝》は，つぎのように記している。

南遺為費宰，叔仲昭伯為隧正，欲善季氏，而求媚於南遺。謂遺請城費，吾多與而役。故季氏城費。

南遺がその邑宰となっており，季氏は費に城づくことによってその勢力を強大なものとし，公室は

弱化していった。杜預が“伝言禄去公室，季子所以強”と説明するようであったろう。この時，南遺の費における力もまた強まったにちがいない。やがて費宰の地位が，南遺から子の南蒯に移っていた時，南蒯は主家の季平子と対立し，季平子を廃して費を公室に帰そうと謀った。ことは昭公十三年の《左伝》に見える。

季平子立，而不礼於南蒯。南蒯謂子仲，吾出季子，而帰其室於公，子更其位，我以費為公臣。子仲許之。

南蒯は季氏に仕える立場にいながら，邑宰であることによって季氏を脅やかすまでに勢力をもってきたのである。ここから，南蒯と季平子の間に，長い抗争が始まる。南蒯の計画は失敗し，費人をあげて斉に亡命することになる。翌翌年，つまり昭公十四年になって，大夫冶区夫の方策が功を奏し，南蒯に従っていた費人が叛くことによって，南蒯の造反は終りをむかえ，費は斉から魯にかえったのである[29]。定公五年，季平子が卒して子の季桓子がその後をつぐと，この費において子洩が費宰になっていた。子洩とは公山不狃のことで，《論語・陽貨》篇に見える公山弗擾のことである。

桓子行東野，及費。子洩為費宰，逆労於郊。桓子敬之。(《左伝》定公五年)

やがて，この公山不狃が季氏と対立するようになる。

季寤・公鉏極・公山不狃，皆不得志於季氏。叔孫輒無寵於叔孫氏，叔仲志不得志於魯。故五人因陽虎。陽虎欲去三桓，以季寤更季氏，以叔孫輒更叔孫氏，己更孟氏。(《左伝》定公八年)

公山不狃らの季氏に対する反乱は，陽虎を主謀者とし，他の叔孫・孟孫氏，魯の公室をもまきこむ，魯の貴族間の大規模な権力闘争となった。司馬遷は，公山不狃が費で反乱を起こし，孔子を招いたという事件をこの翌年，定公九年のこととする。季氏の私邑である費をめぐる状況はこのように多端であった。こうしたなかで，《左伝》によると，定公十二年，子路が季氏宰となって，三都を破壊する政策が実行にうつされた。この時，費が季氏の制御の及ばないところにあったように，叔孫氏の私邑である郈においても侯犯による反乱が起こり，叔孫氏をして“郈非唯叔孫氏之憂，社稷之患也”(《左伝》定公十年)といわしめるほどであった。ややおくれはするが，孟孫氏の私邑である成においても，成宰の公孫宿による反乱があったことが，哀公十四年，十五年の《左伝》に見える。三都を破壊する手はじめとして，季氏が費を破壊しようとした時，公山不狃，叔孫輒らによる抵抗はますます大きくなったことであったろう。そのことを，《左伝》はつぎのようにのべる。

季氏将堕費。公山不狃・叔孫輒帥費人以襲魯。公與三子入于季氏之宮，登武子之台，費人攻之，弗克。入及公側。仲尼命申句須・樂頎下伐之。費人北。国人追之，敗諸姑蔑。二子奔斉，遂堕費。(《左伝》定公十二年)

このような経過をへて，費はようやく季氏の手中にもどったのである。いわゆる三都破壊も，〈孔子世家〉によると，三桓すなわち季孫，叔孫，孟孫の勢力を削ぐために孔子が定公に進言した政策であるとされるが，上にのべたような当時の三桓とその私邑との関係を考えるならば，三都の破壊とは，まさに三桓が自からの勢力を確立するために，それぞれの経済的基盤である邑をもういちど，

自分の手中にとりもどそうとする試みであったにちがいない。そして，季氏においてその役割りをになったのが，孔子の弟子であり家宰である子路であった。そしてまた，費の反乱軍が，季氏の邸やその身辺までせまった時，孔子は“命申句須・樂頎下伐之”とあることからみると，それはたんに子路だけのことではなく，孔子もまた季氏の家において，なんらかの役割りを持っていたかのようである。その場合の孔子の役割りとは，従来いわれているような魯の公室の強大化をはかることではなく，かえって，季氏の権力を強化しようとはかることであったとみるべきであろう[30]。

公山不狃の乱は，孔子と季氏の家宰である子路の手によって解決した。費では邑宰の公山不狃が斉に亡命した結果，邑宰の地位は不在となった。こうした時，不在の邑宰が，孔子の集団のなかから選ばれることは，十分考えられることであろう。すでにふれたが，候補者となるのは閔子騫と子羔の二人である。閔子騫については，《論語・雍也》篇に，季氏が閔子騫を費宰としようとしたことが見えている。皇侃はそのことを説明して，

弟子閔損也。費，邑也，季氏采邑也。時季氏邑宰叛，聞閔子騫賢，故遣使召之，為費宰也。

とのべていることは，上述した予想を裏づけよう。ただ，劉宝楠は，集解の“邑宰数叛”ということについて，“南蒯公山弗擾之類”と説明しているが，この場合は当然公山弗擾だけに限定すべきで，そうでないと閔子騫が登用される積極的な理由が明らかにならない。また，劉宝楠は，この季氏として康子を想定している。その理由として，〈雍也〉篇のこの前の章が季康子のことだからである。ところで，季康子が季桓子のあとをつぐのは，哀公三年のことであり，もし劉宝楠のいうように，この季氏が康子であるならば，閔子騫があげられるのはこの時とは別のことになる。いま，このことを決めるてだてはない。結果的には，閔子騫はそれを拒否した。〈弟子伝〉は，その理由として“不仕大夫，不食汙君之禄”とのべている。

子羔については，〈先進〉篇にそのことが見えていて，子路が子羔を費宰にしようとしたのである。閔子騫の場合には，いろいろと問題があったが，子羔の場合には，ほぼこの時のこととしてよいのではなかろうか[31]。皇侃のこの文にたいする理解もそうみている。

費，季氏采邑也。季氏邑宰叛，而子路欲使子羔為季氏邑宰也。

ところが，ここに問題がある。それは，すでにふれたことであるが，〈仲尼弟子列伝〉には子羔は費郈の宰となった，とあることである。戴望（劉氏正義による）はそれについて，“子路以堕郈後，不可無良宰，故欲任子羔治之”とのべ，子路が三都を破壊するなかで，叔孫氏の邑である郈を破壊したのち，その宰として子羔を登用したとしている。また，劉宝楠も“案戴説頗近理”とそれに一応賛意を示している[32]。しかし，私は，季氏と子路との特別な関係を考えると，季氏の邑である費の宰としたとみるほうが無理はないように考える。もしかりに郈宰となったとするならば，子路は果してそれだけの力を叔孫氏において持っていたのか，ということが疑点として残る。かくて，季氏の家宰，およびその采邑である費の宰と，季氏の中心に孔子の集団から登用されることになった。

公山不狃とともに叛乱を起した季寤，公鉏極，叔孫輒，叔仲志はいずれも季氏の一族あるいは魯の公族であり，公山不狃もまた魯の公族であるらしい[33]。それから考えて，襄公七年，はじめて費

宰となった南遺の場合，はっきりした記事はないが，かれも魯の公族あるいは季氏となんらかの関係をもつものに相違ない。費は季氏の私邑ではあるが，季氏がそこに住んでいたわけではない。自からは他の卿とともに曲阜に住み，私邑には代理人を送って統治させていた。つまり邑宰である。邑宰はもっとも信頼のおける人でなければならず，氏族制によって秩序が保たれていた当時において，魯の公族あるいは一族のものをもって邑宰にあてていたにちがいない。季氏に限らず，邑はそれを所有するものの経済的基盤である。季氏における費はまさにそうであった。だからあらゆる手段をつくして，邑を自からの統制のもとにおこうとしているのであるが，南蒯が邑宰となってからの費は，邑宰と邑人とが手を結んで，季氏に反抗するまでになった。邑宰の地位が父の南遺から子の南蒯へとつがれたことにも，すでに季氏のコントロールを離れたことが示されているのかもしれない。公山不狃の場合も，氏族制度によって邑を遠隔操作しようとした季氏の方法は，有效性をもちえなかった。それどころか，かえって一族の不平分子による反抗の拠点とさえなってしまったのである。その秩序を回復しえたのは，血縁的にまったく関係をもたない，下層階級出身の子路であり，子羔であった。かれらは，下層階級の出身なるがゆえに，士たるべき教育を受けていて，能力的には従来の貴族出身者に，なんら劣るものではなかった。子路が子羔を費の宰としようとした時，孔子は子羔が学問的に未熟であるといって反対した。それにたいして子路は，

有民人焉，有社稷焉，何必読書，然後為学。(《論語・先進》)

とのべて，政治的実践を先にし，のち学を治める方法を主張しているが，たとえ学を治めることをあとまわしとするにせよ，それ以前の貴族出身の邑宰とは，根本的に異質であった。子羔は，その能力において邑宰となりえたのである。これは，当時の氏族制にもとづく邑国家においては，期を画するできごとであったにちがいない。つまり，変化のおそかった中原諸国においても，固定的血縁的な氏族制度にかわって，新しい方法が求められてきたこと，そうした歴史の流れと，孔子の集団に属する人が邑宰となりえたということとは，決して無関係なことではないのであった。

2—3

武城は，費とちがって魯の公邑である。《春秋》襄公十九年に，

城武城。　杜注，泰山南武城県也。

とあるのがそれである。前述したように，武城宰になったのは子游である。

ところで，公邑であるこの武城が，季氏とあるいは当時季氏の家宰であった冉有となにか特別の関係があったのではないのか，と思わせる記事がある。

哀公十一年，斉の国書，高無丕が軍をひきいて魯に侵入する形勢にあった。季孫はその家宰である冉有に対策をたずねる，冉有の答えは，季孫，孟孫，叔孫がともに力を合わせることであるといい，その策がいれられて挙国一致の体制がととのった。この時の魯の陣勢を，《左伝》はつぎのように記している。

孟孺子泄帥右師，顔羽御，邴泄為右。冉求帥左師，管周父御，樊遲為右。季孫曰，須也

弱。有子曰，就用命焉。季氏之甲七千，冉有以武城人三百，為己徒卒。(哀公十一年)

“武城人三百”とは，武城の支配者階級である武士三百人のことである。“徒卒”とは，杜預の説明によると，“歩卒精兵也”とある。《左伝》の記述によると，冉有はたんに季氏の家宰であるばかりでなく，魯国の政治担当者であるかのようである。しかし，たてまえはあくまで季氏の家宰である。その冉有が，公邑である武城の人三百人を自分の徒卒とした，ということは注目する必要があろう。つまり，この時，武城は季氏あるいは冉有の権力がおよぶ範囲下にあったことを，予想させるからである。

子游が，いつ武城の宰になったのかは記事にない。ただ，《左伝》哀公八年に，呉の軍勢が武城から魯に侵入したことをのべたところで，邑宰にとくにふれてないことからみると，この時子游はまだ武城の邑宰でなかったのかもしれない。また，《論語・陽貨》篇に，孔子が子游が邑宰であった武城に行った有名な話しがある。もしこのことを，孔子が魯に帰った哀公十一年以後のこととみるならば，この時にはすでに武城の邑宰であったことになる。そして，この時期は，冉有が季氏の家宰として功績をあげていた時期と重なる。このように考えてくると，子游が武城宰となったことに，季氏の家宰であった冉有がなにかしらのはたらきをしているのではないのか，さらに大胆な予想をするならば，公邑ではあるかもしれないが，自分の権力の及ぶ範囲下にある武城の邑宰として，自からの集団の一員である子游を登用したのではないのか，と推測できるように思う。前項でのべたように，子路が季氏の家宰であった時，その私邑であった費に，集団の一員である子羔を登用した。あたかもそれと同じような関係が，冉有と子游との間にもあったのではないか，と考えたい。

ここで，もうひとつ注目しておかなければならないことがある。それは，子游が武城の邑宰となった時，有司として澹台滅明が登用された，ということについてである。このことにはすでにふれたが，ここでは論を進める都合上，そのことを伝える《論語》の〈雍也〉篇を引いてみる。

子游為武城宰。子曰，女得人焉耳乎。曰，有澹台滅明者，行不由径，非公事，未嘗至於偃之室也。

ここで見るかぎり，澹台滅明が登用される理由は，“行不由径，非公事，未嘗至於偃之室也”という人がらの良さによるようである。澹台滅明についての記事は，《論語》にはこの一条が見えるだけで，《孟子》，《荀子》などにも，まったくその姿を見ない人物である。ただ，《韓非子・顕学》には，澹台滅明についての，やや奇怪な記事がのせられているが，今それらについてふれているいとまはない[34]。

《左伝》哀公八年の条につぎのような話しがある。呉の大夫の王犯は，かつて魯に出奔してきた時，武城宰に任ぜられ，澹台子羽の父と親しかった。やがて，その年の3月，呉の軍が公山不狃の案内で武城から魯に侵入した。たまたま水争いがもとで武城に捕われていた鄫人が呉軍を導いたので，武城は容易に陥落してしまった。その時，国人はかつて王犯と親しかった澹台子羽の父が呉軍に内応しないかと心配した，というのである[35]。

この話しから，澹台滅明が武城の出身であること，国人から疑いをかけられたその父は，武城に

おいてはかなり上位の家がらであるらしいこと，などがわかる。かれが武城の出身であることは，〈仲尼弟子列伝〉にも記されていることである。

このように見てくると，武城の邑宰に任ぜられた子游が，その有司として澹台滅明を登用することにしたのには，ある理由があったように思われてくる。子游は，〈弟子伝〉によると呉の出身である。呉の侵入にそなえた所に位置する武城においては，たとえ孔子集団の優秀な官僚であったとしても，呉出身の子游の立場にはかなり微妙なものがありうるように予想される。あるいは邑宰としての仕事になんらかの不都合が生じたかもしれない。《論語・陽貨》によると，子游のとった武城を治める方法は，君子にも小人にも（邑の支配階級にも被支配階級にも）道を学ぶことに努めさせ，その結果，武城の城内には弦歌の声がみちていた，という[36]。呉の侵入によって生じた混乱は，子游によってすっかり無くなったかのようである。しかし，それとともに澹台滅明を用いたことに注意しなければいけない。武城の邑宰となることに不利な条件をもっていた子游としては，その一方で澹台滅明を登用することによって，かれが武城においてもっている氏族制的秩序を利用することをはかった。これは，子游にとってかなり有効な方法となりえたのではなかろうか。澹台滅明が公正な人と伝えられ，それ故に登用されたとあるが，たとえそうであったとしても，澹台滅明がとくに子游によって選ばれたということには，このようなことも考えられるのである。

顧棟高の《春秋大事表》によると[37]，隠公より哀公にいたる間に，魯に公邑，私邑あわせて38の邑があげられている。たとえ増減はあったとしても，この38ある邑に対して，孔子の弟子が邑宰となったのは，公邑としては，武城の宰としての子游，莒父の宰としての子夏，単父の宰としての子賤，季氏の私邑である費宰としての子羔がいたことが知られるだけである。史料的にそうした制約があることを前提として，以上のべてきたことをまとめてみよう。

季氏における費宰の場合で考えるならば，従来の氏族制にもとづく支配体制に変化が生じたこと，それによって，血縁的つながりを持たなくても，政治的能力にすぐれている官僚が求められるようになった。

しかし，邑内部における邑宰と邑人との関係をみると，いぜんとして，それまでの邑を支配していた氏族制にもとづく関係が重視された。子游が澹台滅明を登用したのは，まさにそのためではなかったろうか。

また，子羔の場合，子游の場合も，かれらが邑宰となりえたのは，同じ集団の子路，冉有がすでに家宰として，季氏の家において一定の権力を持っていたからにちがいない。官僚として人材を登用する場合においても，孔子集団としての機能は積極的に働いているとみたほうがいいように思われる[38]。

3—1

前述したように，季氏の家宰となったのは，子路と冉有，それに疑問を残すが仲弓との三人である。そこで，以下，子路と冉有とについて[39]，家宰となった時期，状況およびはたした役割りなど

について，考えてみよう。

3—2

子路と冉有とが季氏の家宰となったのは，いつのことだったろうか。

子路については，はっきりしているようである。《左伝》定公十二年に“仲由為季氏宰，将堕三都”とあることから，この年に家宰となったとみてよかろう。この時，季氏は桓子の時代である。子路が季氏の家宰となって，まず行なった三都を破壊する政策は，前述したように三桓の勢力を確立しようとするためのもので，その政策の推進者となったのが孔子および子路であったようである。三都を破壊する政策が失敗したことが原因となって，孔子が魯を去って衛に行く時期については，諸説分かれる。いずれも《史記》であるが，〈魯世家〉によると定公十二年，〈衛世家〉によると定公十三年，〈孔子世家〉によると定公十四年のこととなる[40]。孔子と子路との関係からみると，孔子が魯を去った時，子路もまた季氏の家宰を辞し，孔子に従ったものと考えられる。だから，子路が季氏の家宰であったのは，定公十二年から，孔子とともに魯を去る，ごく短かい期間だったことになる。

一方，冉有が季氏の家宰となったのは，いつのことだろうか。〈孔子世家〉によると，哀公三年，孔子に従って周遊していた冉有が，季康子に招かれたとある。その間の事情を，〈孔子世家〉はつぎのように記している。

> （季康子）欲召仲尼。公之魚曰，昔吾先君用之不終，終為諸侯笑。今又用之不能終，是再為諸侯笑。康子曰，則誰召而可。曰，必召冉求。於是使使召冉求。

季氏の家では，この哀公三年に桓子がなくなり，康子がその後を継いでいた。〈孔子世家〉によると，孔子あるいは冉有を招くことは，季康子の発案になるようである。そして，招かれた冉有は，この時から，季氏の家において重要な役割りをになうようになる。冉有の名が《左伝》にはじめて見えるのは，哀公十一年である。この年の春，斉の国書，高無丕が軍をひきいて魯に侵入をはかった。斉の侵略に際して，季康子は，家宰である冉有に防衛の方法を相談する。冉有は，挙国の体制をととのえるとともに，自からも左師をひきい，武城の戦士三百人をひきいて斉と戦い，大功を立てたのである[41]。〈孔子世家〉はこのことを，

> 其明年，冉有為季氏将師，与斉戦於郎，克之。

としている。〈孔子世家〉の記事によると，斉と戦うのは哀公八年のこととなり，《左伝》との間に3年のずれがある。先人の理解は，この時の戦いを哀公十一年にかけるべきとするものが多い[42]。じつは，そのほうが，ことのすじみちが立ちやすい。というのは，冉有がこの戦いで成功を収めたことは，孔子が魯に帰えるための重要な布石となっているからである。みごとな戦いをした冉有にたいする季康子の質問がそれを示している。

> 季康子曰，子之於軍旅，学之乎，性之乎。冉有曰，学之於孔子。季康子曰，孔子何如人哉。対曰，用之有名，播之百姓，質諸鬼神而無憾。求之至於此道，雖累千社，夫子不利

也。康子曰，我欲召之，可乎。対曰，欲召之，則毋以小人固之，則可矣。(〈孔子世家〉)

このはなしは，すぐあとにつづく孔子の帰魯をより自然なものとするためであるかもしれない。そして，孔子の“帰魯”を願って，冉有がここでのべていることは，哀公三年に，季康子によばれた冉有が，孔子の一行から別かれる時，子貢とかわしたことば，

子贛知孔子思帰，送冉求，因誡曰，即用，以孔子為招云。(〈孔子世家〉)

と照応しているようである。

季氏の家宰としての冉有の活躍は，孔子の死後もつづくようである。《左伝》哀公二十三年に，

宋景曹卒。季康子使冉有弔且送葬。曰，敝邑有社稷之事，使肥與有職競焉。是以不得助執紼，使求従輿人。

とあることがそれを示している。冉有を登用した季康子は，哀公二十七年に卒している。

このように見てくると，子路が家宰であったのは，季桓子の時で，定公十二年以後のごく短期間，つまり，三都を破壊する政策が失敗し，孔子とともに魯を立ち去るまでの間であり，一方，冉有が家宰であったのは，季康子の時で，哀公三年以後のかなり長い期間，であるとみられるのである。

ところがここにひとつ問題がある。それは，《論語》の〈季氏〉につぎのような記事が見えるからである。

季氏将伐顓臾。冉有季路見於孔子曰，季氏将有事於顓臾。孔子曰，求，無乃爾是過與。夫顓臾，昔者先王以為東蒙主，且在邦域之中矣。是社稷之臣也，何以伐為。

この文によると，冉有と子路とは，二人そろって季氏に仕え，その家宰であるかのようである。この事件がいつ起ったのかということを知る手がかりはない。たとえば，本文の季氏について，劉宝楠は康子であろうという。しかし劉宝楠は康子であると想定することの理由をとくに説明しているわけではない。いったい，この事件は，《論語》のここ以外に見えないことであるため，歴史的な事実として疑がわしいのである。しかし，しいてこの事件がいくらかでも歴史的事実を反映したものである，と考えるならば，そして，季氏が康子であるならば，冉有とともに子路も一緒に登場することは，さきの推定と矛盾してしまう。季康子の時の家宰は冉有であって，子路ではないからである。ここは冉有ひとりに限られるべきであるが，はなしそのものは，それで一向さしつかえないようである。なぜなら，子路は，ここでは名が出ているにすぎず，孔子と対話し，批判されているのは，冉有ひとりだからである。歴史的事実が反映していて，しかもここに冉有と子路と二人が出てくるとすれば，結局，朱子のつぎのような理解をすることによって，つじつまを合わせなくてはならなくなるであろう。

按左伝史記，二子仕季氏不同時，此云爾者，疑子路嘗従孔子自衛反魯，再仕季氏，不久而復之衛也。

子路雖不與謀，而素不能輔之以義，亦不得為無罪，故并責之。(《論語集注》)

つぎに，もしこのはなしがあまり歴史的事実を反映していないというのであれば，子路と冉有と

が同時に季氏の家宰として登場することになっても，別段不自然ではないように思われる。すでにのべたように，子路と冉有とはあい前後して季氏に家宰として仕え，季氏の家においてその地位に相応する役割りをはたしている。その故にか，孔子の集団において，二人は政治の達人と称されているのであろう。このはなしは，魯における季氏の立場と，それを結果的にはもっとも強力に支持した孔子集団の子路と冉有との関係を，象徴的にひとつのはなしに仕上げたように思われる。歴史的事実を反映していないということは，表面に表われている個々の現象についていっているのであって，このはなしそのものが歴史的背景をもっていない，ということではない。このように考えてくると，このはなしは，子路と冉有とが季氏の家宰として仕え，その間にはたした貢献度によって，冉有がより多く発言し，孔子によって問責されているとみてよいのかもしれない。

以上のべてきたことによって，〈季氏〉篇のこの章は，子路と冉有とが同時に季氏の家宰であったのではないか，ということを必らずしも例証するものでないことが了解されたかと思う。

3—3

ところで，子路と冉有とが季氏の家宰となりえたのは，どうしてだったのだろうか。子路については，あるいは，当時すでに魯（あるいは季氏）に仕えていたはずの孔子の推薦ということがあったのかもしれない。

それからまた，〈孔子世家〉に見えた季康子が冉有を招いた記事などからすると，冉有の場合にはその登用が，季氏側からの働らきかけによるものであることは，ほぼ認めてよいかもしれない。

孔子についてであるが，

> 公山弗擾以費畔，召。孔子欲往。（〈陽貨〉）

とか，

> 佛肸召。子欲往。（〈陽貨〉）

というように，孔子が招かれた記事が《論語》に見えている。ほぼ同じようなかたちの招きかたが，公山弗擾に限らず，季氏からもあって，冉有にせよ，子貢にせよ季氏の家宰として出仕するようになっていったのではあるまいか。もちろん，その時に応じて，拒否したりすることがあったことも予想される。1—2に示したような場合がそれである。

ところで，血縁的なつながりをもたず，出身階層からいってもさまざまであった孔子集団に属する人びとが，当時の社会体制のなかで家宰になりえたということは，どう考えたらいいのだろうか。

季康子が，子路・子貢・冉有の政治的能力について，孔子にたずねたことがあった。

> 季康子問仲由，可使従政也與。子曰，由也果，於従政乎何有。曰，賜也可使従政也與。曰，賜也達，於従政乎何有。曰，求也可使従政也與。曰，求也藝，於従政乎何有。（《論語・雍也》）

また〈先進〉篇に見える，季子然が，子路，冉有は大臣になりうるかというような質問をしている

が，季氏をとりまく社会状況が，冉有や子路，子貢に政治を担当させうるように変っていたからに相違ない。

このようにみてくると，子路や冉有が家宰となった場合においても，子羔や子游が邑宰となった場合とほとんど同じ状況があったと考えられる。孔子集団のある人びとは，血縁出身の官僚では処理しがたくなってきた問題を，解決しうる能力を学んでおり，その集団はそのような要請に応ずることのできる人材を育てていた。そして季氏の招請に応じたのである。そうした人の代表が，子路や冉有ではなかったか。これこそ，《論語・先進》にいう，政治には冉有，季路と称されるゆえんであったにちがいあるまい。

3—4

《左伝》の哀公十一年にひとつの記事がある。それは，賦の制を変えようとした季孫が，家宰の冉有をして，当時すでに魯に帰っていた孔子に，その可否を問わせたというものである。

> 季孫欲以田賦。使冉有訪諸仲尼。仲尼曰，不識也。三発。卒曰，子為国老，待子而行，若之何子之不言也。仲尼不対。而私於冉有曰，君子之行也，度於礼，施取其厚，事挙其中，斂従其薄，如是則以丘亦足矣。若不度於礼，而貪冒無厭，則雖以田賦，将又不足。且子季孫若欲行而法，則有周公之典在。若欲苟而行之，又何訪焉，弗聴。

この時，孔子もまた魯におけるある地位——国老という地位についていたらしい[43]。冉有の問いかけに，孔子は終始口をつぐんで答えようとしなかった。やがて，“私”という立場で，“君子之行”について冉有に答えた。この“私”とは，この時の二人の地位，つまり国老としての孔子と，季氏の家宰としての冉有との地位を認めない関係，つまり，お互いに出仕する以前の孔子集団における関係ということではなかろうか。孔子は，冉有が季氏の家宰であることを認めていないのである。孔子集団の成員ならば当然持っているはずの自覚，道のあるところに仕えるという士の自覚からするならば，冉有はここで進退を決めなければならないのである。季氏に血縁的につらならない故，それは可能なことであった[44]。しかし，家宰としての冉有の意識は，すでにそこにはなかったようである。あるいは，有能な官僚としての冉有には，周囲の状況がそうした行為を許さなくなっていたのかもしれない。このことが，〈先進〉篇にみえる，

> 季氏富於周公，而求也為之聚斂，而附益之。子曰，非吾徒也，小子鳴鼓而攻之，可也。

ということとして示されている。士たるための自覚を捨ててまで，その地位に在ることを求めるならば，それはすでに集団の一員ではない。冉有が季氏の家宰として仕えてゆくうえでの論理は，孔子集団の論理とはすでに遠くへだたってしまっていたのである。これが，“非吾徒也”ということばが示すことなのであろう。

子路が魯を去ってのち，衛大夫孔悝の邑宰となったことは，すでにのべた。やがてかれは，哀公十五年に，蒯聵の乱にまきこまれて死ぬ。この乱に際して，難をさけようと立ち去る子羔とかわしたことばを《左伝》は，

季子将入。遇子羔将出。曰，門已閉矣。季子曰，吾姑至焉。子羔曰，弗及，不踐其難。季子曰，食焉，不辟其難。子羔遂出。子路入及門。公孫敢門焉，曰，無入為也。季子曰，是公孫也，求利焉而逃其難，由不然。利其禄，必救其患。(哀公十五年)

と記しており，《史記》には，

遇子羔出衛城門。謂子路曰，出公去矣，而門已閉。子可還矣，毋空受其禍。子路曰，食其食者，不避其難。子羔卒去。(〈仲尼弟子列伝〉)

とある。《左伝》，《史記》ともに，子路が乱のなかにもどっていった理由を，“食焉”“利其禄，必救其患”あるいは，“食其食”という関係，つまり仕えることによって禄を給付されている臣であるから，君の患難を救わなければならない，といわせている。子路の行為と論理とは，晉の欒盈の出奔に従って死刑に処せられた辛俞の行為に似ている[45]。しかし，辛俞は，三世仕えてはじめて，その君に死をもって仕えるといっているのである。それにたいして子路の孔悝との関係——死をもって仕えた関係は，《左伝》も《史記》もともにいまあげたような理由しか示していない。あるいは，この記事には示されていない，特殊な関係が孔悝との間にあったのかもしれないが[46]，しかし，ここで示されるような理由であるかぎり，子路の行為は孔子のめざしたものと異なっているといわざるをえない。士の自覚を求め，仕えるということはその結果でしかないとみるとき，子路のこの行為は，絶対に許すことのできないことであったにちがいない。〈先進〉篇に，子路と冉有とを評して，孔子はつぎのようにいっている。

季子然問仲由冉求，可謂大臣與。子曰，吾以子為異之問，曾由與求之問。所謂大臣者，以道事君，不可則止。今由與求也，可謂具臣也。

孔子が，子路と冉有とを具臣であると評したのは，これまでのべてきたような冉有や子路の行為についてではないだろうか。冉有が士たる自覚を捨ててまで家宰の地位に止まり，あるいは子路が君臣関係の契約を重視したため死ななければならないようなことは，孔子にとっては具臣の行為としかうつらなかった[47]。

しかし，孔子集団の成員が優秀な官僚として出仕していった時，この冉有や子路のような行為をとる人が出てくることは，十分ありうることであったろう。孔子が冉有や子路の行為を，“非吾徒也”とか“具臣”であるとして批判しているが，そうしたことは，孔子集団が時代の要請に応ずるか否かという時，つねに内部にひそむ矛盾として露呈せざるをえなかったことのように思う。

注

1) 孔子と弟子たちとの組織を，ふつう教団とか学団とかよんでいる。しかし，私がそういわないで，あえて集団ということばを用いたのは，孔子と弟子との関係が，たんに教える，教えられるということだけに止まっていないとみるからである。また，この小論においては，孔子についてはできうるかぎり言及しないことにした。孔子と切離して，弟子たちの行動をおさえたかったからである。

2) ここには紹介しなかったが，孔子以前の士が武士であり，以後の士が文士である，とみるのは，李亜農〈知識分子階層的出現〉(《李亜農史論集》所収・1962年・上海人民出版社)である。春秋末期にそうした階

層が出現した理由として，かれはつぎのような理由をあげる。(1) 春秋末期の鉄器の普及による生産力の増大，その結果，非農耕人口の増加をうながした。(2) 中央集権化によって，武士の活動範囲が縮少し，その子弟は他に職業を求めざるをえなくなった。(3) 商業の発達と大家族制組織の瓦解により，氏族制のわくから自由になりえた人が生じた。

3) 拙論《論語に見える君子について》(東京教育大学漢文学会会報 第28号・昭和44年) において，主として君子ということを手がかりに，こうしたことを考えてみた。

4) たとえば，《説文》には“士，事也”とあり，段玉裁はそれについて“幽風周頌伝凡三見。大雅武王豈不仕，伝亦云，仕事也。鄭注表記申之曰，仕之言事也。士事疊韻，引伸之，凡能事其事者称士。”という。

5) 《史記・仲尼弟子列伝》の構成については，拙論《仲尼弟子列伝について》(東京教育大学文学部紀要・国文学漢文学論叢 第15輯・昭和45年) において論じた。

6) 〈仲尼弟子列伝〉は，その主たる材料を，《論語（論語弟子問)》《論語弟子籍》からとっているのであるが，その外に，司馬遷の当時，世間に伝わっていた孔子の弟子についての“雅順”なる記事をも多くとりいれている。それゆえ，〈仲尼弟子列伝〉は，あくまで，司馬遷の見た弟子たちの記録である。である以上，その記事を資料とする場合，当然吟味が必要となるのであるが，今はその作業を部分的にしか行なっていない。前掲拙論《仲尼弟子列伝について》を参考。

7) 貧窮ながらも仕えず，しかも農民にもならない人びとの存在，この点が西周の武士とは異なる。このような階層——知識分子階層が諸子百家となる，と李亜農は前掲論文《知識分子階層的出現》で説く。

8) 梁玉繩《史記志疑》巻二十八にくわしい考証がすすめられている。

9) 前掲《仲尼弟子列伝について》109ページ参照。

10) 大宰嚭召季康子。康子使子貢辞。(《左伝》哀公七年)
公会呉于橐皐。呉子使大宰嚭請尋盟。公不欲，使子貢対曰，…(《左伝》哀公十二年)
子服景伯如斉。子贛為介，見公孫成。(《左伝》哀公十五年)

11) 子游為武城宰。子曰，女得人焉耳乎。曰，有澹台滅明者，行不由径，非公事，未嘗至於偃之室也。(《論語・雍也》)
子游既已受業，為武城宰。(《史記・仲尼弟子列伝》)

12) 前注を参照。
澹台滅明者，武城人，字子羽，……既已受業，退而修行，行不由径，非公事不見卿大夫，南游至江，従弟子三百人，設取予去就，多施乎諸侯。(〈仲尼弟子列伝〉)

13) 子夏為莒父宰，問政。子曰，無欲速，無見小利。欲速，則不達。見小利，則大事不成。(《論語・子路》)
子夏欲往莒父為宰，故先問孔子為政之法。(皇侃《論語集解義疏》)

14) 莒係以父，魯人語音，如梁父亢父単父是也。(顧棟高《春秋大事表》七)
宓不斉，字子賤。孔子謂子賤，君子哉。魯無君子，斯焉取斯。子賤為単父宰。(〈仲尼弟子列伝〉)
宓子賤治単父，彈鳴琴，身不下堂，而単父治。(《呂氏春秋・察賢》)

15) 原思為之宰。與之粟九百。辞。子曰，毋，以與爾鄰里鄉党乎。(《論語・雍也》)
包曰，孔子為魯司寇，以原憲為家邑宰。(《論語集解》)
孔子為魯司寇，有采邑，故使原憲為邑宰也。(皇侃《論語集解義疏》)
劉宝楠は，集解のような理解にたいして，孔子が魯に仕えた時，采地があったことを聞かないから，原憲は孔子の邑宰ではなくて，家相となったのであろうという。邑宰であるか家相であるかはともかく，仕えたのが孔子であるなら，孔子から粟九百を受けた弟子がいるということは，興味あることである。

16) 仲由為季氏宰，将堕三都。(《左伝》定公十二年)
子路為季氏宰。(〈仲尼弟子列伝〉)
季康子問仲由，可使従政也與。子曰，由也果，於従政乎何有。(《論語・雍也》)
季子然問仲由冉求，可謂大臣與。子曰，吾以子為異之問，曽由與求之問。所謂大臣者，以道事君。不可則止。今由與求也，可謂具臣矣。(《論語・先進》)

17) 孔子のこの間の魯における地位については，渡辺卓《去魯——孔子説話の思想史的研究その三》（山梨大学学芸学部研究報告 第三号・1952年）に精緻な批判と考察とが進められている。

18) 子路使子羔為費宰。子曰，賊夫人之子。子路曰，有民人焉，有社稷焉，何必読書，然後為学。子曰，是故悪夫佞者。（《論語・先進》）

子路使子羔為費郈宰。（〈仲尼弟子列伝〉）

論語及楓・三本，無郈字，此衍字。沈濤曰，史記費字衍文，蓋古本論語，作郈宰，不作費宰。（《史記考証》）

19) 季氏将伐顓臾，冉有季路見於孔子曰，……（《論語・季氏》）

季氏富於周公，而求也為之聚斂而附益之。子曰，非吾徒也。小子鳴鼓而攻之，可也。（《論語・先進》）

季孫謂其宰冉求曰，斉師在清，必魯故也，若之何。（《左伝》哀公十一年）

季孫欲以田賦，使冉有訪諸仲尼。仲尼曰，丘不識也。三発。卒曰，……（《左伝》哀公十一年）

20) 仲弓為季氏宰，問政。子曰，先有司，赦小過，挙賢材。（《論語・子路》）

仲弓将往費為季氏采邑大宰，故先諮問孔子，求為政之法也。（皇侃《論語集解義疏》）

21) 冉求帥左師，周管父御，樊遅為右。季孫曰，須也弱。有子曰，就用命焉。（《左伝》哀公十一年）

22) 常相魯衛，家累千金，卒終于斉。（〈仲尼弟子列伝〉）

23) 3—3において詳述する。

24) 孔子既没，子夏居西河教授，為魏文侯師。（〈仲尼弟子列伝〉）

25) 宰我為臨菑大夫，与田常作乱。以夷其族。孔子恥之。（〈仲尼弟子列伝〉）

このことについては前掲拙論《仲尼弟子列伝について》104ページ参照。

26) 家宰と邑宰について楊寛は‘帮助卿大夫統治人民的家臣有“宰”。宰有家宰和邑宰二種，家宰掌管全家的政務，邑宰則掌管某個邑的政務，包括財政和軍政。〈試論西周春秋間的宗法制度和貴族組織〉（《古史新探》中華書局・1965年・北京）とのべている。しかし，楊寛がいう邑宰なるものは，私邑についてだけのべて，公邑にはふれない。これについては，顧棟高がすでに，公邑と私邑ととわず邑宰といったと考証している。《春秋大事表・列国官制》。証据は多くはないが，ほぼこの理解によっていいのではないかと考える。

27) 有司については，《論語・子路》の“仲弓為季氏宰，問政。子曰，先有司，赦小過，挙賢材”とある。楊寛は（前掲論文）この有司について，㈠土地を管理し徒衆を徴発する司徒，㈡軍賦を管理し戦争をする司馬あるいは馬正，㈢工匠と製造を司どる工師，の三つをあげる。

28) 劉宝楠は《論語正義》において，顧棟高の《春秋大事表》にもとづき，魯大夫庳父の費と季氏の費とは別であるといい，江永が《春秋地理考実》において，同じものとしている説を否定している。

29) 叔弓囲費，弗克，敗焉。平子怒，令見費人執之以為囚俘。冶区夫曰，非礼也。若見費人，寒者衣之，飢者食之，為之令主，而共其乏困，費来如帰，南氏亡矣。民将叛之，誰与居邑。若憚之以威，懼之以怒，民疾而叛，為之聚也。若諸侯皆然，費人無帰，不親南氏，将焉入矣。平子従之，費人叛南氏。（《左伝》昭十三年）

南蒯之将叛也，盟費人。司徒老，祁慮癸偽廃疾，使請於南蒯曰，臣願受盟而疾興。若以君霊不死，請待間而盟，許之。二子因民之欲叛也，請朝衆而盟，遂劫南蒯曰，群臣不忘其君，畏子以及今，三年聴命矣。子若弗圖，費人不忍其君，将不能畏子矣。……司徒老，祁慮癸来帰費。（《左伝》昭公十四年）

30) 渡辺卓前掲論文参照。

31) 木村英一《孔子と論語》（創文社・昭和46年）は，〈第三章　孔子の職業について〉において，費の宰の問題にふれ，子羔は孔子によって反対され，閔子騫は自から仕官を欲せず，最後に，仲弓が推薦されてその職についた，と推測している。（同書 67～68ページ）

32) 《論語・先進》“子路使子羔為費宰……”についての劉宝楠《正義》である。

33) 季寤，季桓子之弟。公鉏極，公彌曾孫，桓子族子也。叔孫輒，叔孫氏之庶子也。叔仲志，叔仲帯之孫也。（以上いずれも杜注）

《潛夫論・志氏姓》公山氏，魯公族，姬姓。

34) 澹台子羽，君子之容也，仲尼幾而取之，與處而行不称其貌……故孔子曰，以容取人乎，失之子羽，以言取

人乎，失之宰予。(《韓非子・顕学》)

拙稿《仲尼弟子列伝について》107ページ参照。

35) 三月呉伐我，子泄率。故道険従武城。初武城人或有因於呉境田焉。拘鄫人之漚菅者，曰，何故使吾水滋。及呉師至，拘者道之以伐武城克之。王犯嘗為之宰。澹台子羽之父好焉，国人懼。(《左伝》哀公八年)

36) 子之武城聞弦歌之声。夫子莞爾而笑，曰，割雞焉用牛刀。子游対曰，昔者偃也聞諸夫子曰，君子学道則愛人，小人学道則易使也。(《論語・陽貨》)

37) 顧棟高《春秋大事表七・列国都邑・魯》

38) 後年，子路が衛の孔悝の邑宰であった時，子羔は衛の大夫であった。このような例はまだほかにもあったのかもしれない。

39) 仲弓および子貢については，べつに機会を改めてのべようと思う。

40) 孔子の去魯の時期について，木村前掲書は，定公十三年のこととしている。(同書 66ページ)

41) 斉為鄎故。国書，高無丕帥師伐我，及清。季孫謂其宰冉求曰，斉師在清，必魯故也，若之何。冉求曰，一子守，二子従公，禦諸境。……冉求帥左師，管周父御，樊遲為右。季孫曰，須也弱。有子曰，就用命焉。季氏之甲七千，冉有以武城人三百，為己徒卒。(《左伝》哀公十一年)

42) 徐広曰，此哀公十一年也，去呉会繒已四年矣。(《史記集解》)

徐説去会四年是也。(《史記索隠》)

梁玉繩曰，其明年三字誤，当作後四年，故徐広曰，此哀公十一年也，去呉会繒已四年矣。(《史記考証》)

43) 《国語・魯語下》に，これとほぼ同じ内容の記事がみられるが，それには孔子が国老である，ということは見えない。

44) このことを学説としてはっきりうちだすのは孟子である。

斉宣王問卿。孟子曰，王何卿之問也。王曰，卿不同乎。曰，不同。有貴戚之卿，有異姓之卿。王曰，請問貴戚之卿。曰，君有大過則諫，反覆之而不聴，則易位。……然後請問異姓之卿。曰，君有過則諫。反覆之而不聴，則去。(《孟子・万章下》)

45) 欒懐子之出，執政使欒氏之臣勿従。従欒氏者大戮施。欒氏之臣辛俞行。吏執之，献諸公。公曰，国有大令，何故犯之。対曰，臣順之也，豈敢犯之。執政曰，無従欒氏而従君，是明令必従君也。臣聞之曰，三世事君，君之。再世以下，主之。事君以死，事主以勤，君之明令也。自臣之祖，以無大援於晉国，世隷於欒氏，於今三世矣。臣故不敢不君。今執政曰，不従君者為大戮，臣敢忘其死，而叛其君，以煩司寇。(《国語・晉語八》)

46) しかし，孔悝のために死ぬ子路の行為を，道に志ざす士としてふさわしいと孔子がみていたかのような記事もある。《左伝》哀公十五年の記事をうけて，〈仲尼弟子列伝〉に，つぎのようにある。

子路曰，君子死而冠不免。遂結纓而死。孔子聞衛乱曰，嗟乎，由死矣。已而果死。故孔子曰，自吾得由，悪言不聞於耳。

47) 〈先進〉篇のこの文がいつのものかはわからない。文脈から子路がまだ生きている時のことであると思われる。また冉有についても，かれが季氏の家宰としてはなばなしい活躍をはじめる前のことであるかもしれない。しかし，政治にはすぐれていると称された子路と冉有に，すでに，ここでのべるような傾向にあった，そして，そのことを孔子は自分の立場と矛盾するものであると感じとっていた，その結果がこうしたことばとなって表われたように思うのである。

(1972.10.31)